

日新公いろは歌

いいにしえの 道を聞きても 唱えても我が行いにせずばかいなし
ろ 楼の上もはにふの小屋も住む人の心にこそはたかきいやしき
は はかなくもあすの命をたのむかな 今日も今日もと学びをばせで
に 似たるこそ友としよければ交らばわれにます人おとなしき人
ほ ほとけ神他にましまさず人よりも心に恥じよ天地よく知る
へ 下手ぞとて我とゆるすな稽古だにつもらばちりも山とことのは
と 科ありて人をきるとも軽くすないかす刀もただ一つなり
ち 知恵能は身につきぬれど荷にならず人はおもんじはずるものなり
り 理も法もたたぬ世ぜとてひやすき心の駒の行くにまかすな
ぬ ぬす人はよそより入ると思うかや耳目の門に戸ざしよくせよ
る 流通すと貴人や君が物語りはじめて聞ける顔もちぞよき
を 小車のわが悪業にひかされてつとむる道をうしと見るらむ
わ 私を捨てて君にしむかわねばうらみも起こり述懐もあり
か 学問はあしたの潮のひるまにもなみのよるこそなおしづかなれ
よ 善きあしき人の上にて身をみがけ友はかがみとなるものぞかし
た 種となる心の水にまかせずば道より外に名も流れまじ
れ 礼するは人にするかは人をまたさぐるは人をさぐるものかは
そ そしるにも二つあるべし大方は主人のためになるものと知れ
つ つらしとて恨みかえすな我れ人に報い報いてはてしなき世ぞ
ね ねがわずば隔てもあらいつわりの世にまことある伊勢の神垣
な 名を今にのこしおきける人も人も心も心何かおとらん

ら 楽も苦も時すぎぬれば跡もなし世に残る名をただおもふべし
む 昔より道ならずしておごる身の天のせめにしおわざるはなし
う 憂かりける今の身こそはさきの世のおもえばいまぞ後の世ならむ
ゐ 亥にふして寅には起くと夕霧の身をいたずらにあらせじがため
の のがるまじ所をかねて思いきれ時にいたりて涼しかるべし
お 思ほえず違うものなり身の上の欲をはなれて義をまもれひと
く 苦しくとすぐ道をいけ九折の末は鞍馬のさかさまの世ぞ
や やわらぐと怒るをいわば弓と筆鳥と二つのつばさとを知れ
ま 万能も一心とあり事ふるに身ばしたのむな思案堪忍
け 賢不肖用い捨るつという人も必ずならば殊勝なるべし
ふ 無勢とて敵をあなどることなかれ多勢と見ても恐れずべからず
こ 心こそ軍する身の命なれそろゆれば生きそろわねば死ぬ
え 回向には我と人とをへだつなよ看経はよししてもせずとも
て 敵となる人こそはわが師匠ぞとおもいかえして身をもたしなめ
あ あきらけき目も呉竹のこの世より迷わばいかに後のやみぢは
さ 酒も水ながれも酒となるぞかしたただなさけあれ君がことの葉
き 聞くことも又見ることも心がら皆まよいなりみな悟りなり
ゆ 弓を得て失うことも大将の心一つの手をばはなれず
め めぐりては我身にこそは事えけれ先祖のまつり忠孝の道
み 道にただ身をば捨てんと思いとれかならず天のたすけあるべし
し 舌だにも齒のこわきをば知るものを人はこころのなからましやは
ゑ 酔える世をさましもやらでさかずきに無明の酒をかさむるはうし
ひ ひとり身あわれと思え物毎に民にはゆるすところあるべし

も もろもろの国や所の政道は人にまずよく教えならわせ

せ 善にうつり過れるをば改めよ義不義は生まれつかぬものなり

す 少しを足れりとも知れ満ちぬれば月もほどなく十六夜の空